

今井範子

教育プログラム取組実施担当責任者・推進委員会委員長・社会生活環境学専攻教授

本教育プログラムが採択されてから、1年半近くたちました。この短期間のなか、本事業に関連する教員と学生の総力によって、順調に新しいプログラムが展開されてきました。平成18年度4月入学者から、修士論文と博士論文の作成に向けて、専門基礎群、専門応用群、研究マネジメント群、キャリア形成群、論文作成の5つの群からバランスよく科目を選択し、コースワークを充実させた新カリキュラムが実施されています。

標準年限内の学位取得を目指し、学位授与に至るまでのプロセス管理体制の充実が図られ、博士後期課程では、予備審査時期や博士学位取得基準等が明確化されました。セメスター毎のガイダンスの充実、複数教員指導体制によるモニタリングシステムの活用が進められました。

こうしてコースワーク、論文作成指導、学位審査等の各段階が有機的なつながりをもって学位授与へと導く体制が構築されました。

そのほか教員と学生が協働するFD活動の推進や、少人数教育に対応した学生による授業評価が実施されています。人間文化研究科評価委員会と連携しながら、教育プログラム推進委員会では、平成17～18年度の両年度において、本教育プログラムの自己点検・評価を行い、改善点を検討し次の展開に向けてフィードバックしてきました。さらに、自立した研究者養成の一貫として、学生による自主企画研究セミナーの開催や、フィールド調査、研究成果物の公表に印刷にかかる支援も予算内で積極的に行なわれています。

現代社会のニーズに応え、生活環境の諸課題の解決を志向し、創造的で自立した研究者の養成にむけてその体制が、今後、教育研究の高まりのなかにいっそう進展していくことと思います。

女性研究者養成・支援講演会

「女性研究者を育てる教育環境デザイナー—女子大学における課題と展望—」

主催：「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成」教育プログラム推進委員会
女性研究者支援モデル育成事業「生涯にわたる女性研究者共助システムの構築」事業本部

活動報告

2006年12月3日（日）13時から本学記念館・講堂において開催され、208名の参加者（学生108名、教員59名、職員12名、一般29名）を得て盛会となりました。

本学の「魅力ある大学院教育」イニシアティブ及び女性研究者支援モデル育成事業等の取組の紹介の後、まず、板東久美子内閣府男女共同参画局長が、男女共同参画にかかる諸問題や女性研究者が育つ環境づくりに向けた課題を講演されました。その中で、女子大学への期待として「女性のライフイベント、ライフサイクルに即した教育、研究者育成システムの提供」「多様なロールモデルの提示」「女性のリーダーシップの育成」「多様な教育分野の発展」「女性の生涯にわたるレベルアップ、チャレンジのための多様な学習ニーズへの対応」「わが国全体の女性研究者育成環境づくりへの積極的貢献」の諸点を指摘されました。続いて、羽入佐和子お茶の水女子大学副学長が、国際競争力を高めるお茶大の教育プログラムと支援環境の整備等に関する果敢な取組を報告されました。その後、今井範子本学教授をコーディネーターとして、会場を交えた意見交流が活発に行なわれました。本講演会の開催は、女性研究者養成に関わる教育研究活動や支援環境整備のデザインにむけて、女子大学としての本学の役割、諸課題をより明確化する機会となりました。



イニシアティブ関連新規開講科目の紹介

大学院前期課程で求められる英語力のレベルは、さまざまです。執筆する論文はすべて英文という人もあれば、ほとんど目にするものもないという人もいます。ただ、論文のアブストラクトをつくる、国際学会のコーディネートを手伝う、また、自分の研究内容を外国人に説明するようなことは、前期課程在学中には誰でも経験することです。将来、海外で活躍したいと考えている人だけでなく、研究者をめざす人、専門的な職業につきたいと考えている人にも、最低限に必要な能力であるといえます。この授業では、海外20カ国以上で活躍しておられる国際コンサルタント・関口正也先生をゲストスピーカーにお招きし、こうした能力をみがくためのコン

私は大学に入ってから全くといいほど英語の勉強をしておらず、取り組む時といえばTOEICを受ける直前程度で、英語の授業を受けるのは学部の2年生以来のことでした。

1日目の授業では、論文のための文法・語法を学び、自分の伝えたいことを明確にすること、文の組み立てを整理することの必要性について理解できました。パワーポイントを使う際の見やすいデザイン、話し方・話す速度など、コンサルタントとして活躍しておられる関口先生ならではの授業でした。研究発表とは、「研究を発信するためにある」ということをあらためて実感できました。

私の研究

私の研究テーマは、開発途上国に対する体育・スポーツ分野における援助の展開です。研究のきっかけは、学部2年生の時に経験したネパールの小学校でのボランティア活動です。ボランティアの教員として英語と体育を教えるはずが、実際には体育の授業がなく理科の教員不足のため、英語と理科を担当することになりました。そのような現状に悩みジレンマを抱えながら活動した経験から、開発途上国における体育やスポーツの在り方に興味を持ちました。

修士論文では、青年海外協力隊のスポーツ部門における水泳を取り上げ、隊員報告書にみられる問題点の分析を行いました。そして、

「学術基礎英語」

増井正哉

社会生活環境学専攻 生活環境計画学講座教授



テンツを用意しています。

まず、最初に、①学術的な文章を書くにあたって必要な文法や語法、②主旨、論旨を明快にする文章の組み立て方、③英語によるプレゼンテーションの方法（パワーポイントでの見やすいデザイン、分かりやすい話し方・話す速度）などの基本を学んだ後、④2～3名のグループに分かれて、指定されたテーマを英文でプレゼンテーションする練習をします。そして、最後に⑤自分の学位論文のアブストラクトをつくる課題に取り組みます。

2日間の短い集中授業ですが、盛りだくさんの内容で、諸姉の英語力のアップをめざします。

「学術基礎英語」を受講して

友田愛子

博士前期課程 人間環境学専攻1回生

2日目にグループワークで取り組んだアフガニスタンの難民に関する発表は、私自身にとってとても有意義なものになりました。初めてのテーマで異なる学部の人と一緒に課題に取り組み、自分の考えと他の人の意見を調整しながら、プレゼンテーションを組み立てていくのは新鮮な経験でした。

このように、学術基礎英語では、論文を書くための文法・語法だけでなく、日本語から英語に変えて文章をつくるための論理の組み立て方、自分の意見を主張できるプレゼンテーションの方法を知ることができ、自分の今後の活動においても意義のある授業でした。

「開発途上国に対する体育・スポーツ分野の援助」

前坊いと子

博士前期課程 人間行動科学専攻2回生



隊員の充実感を獲得しながらのスムーズな援助活動の展開を可能にするために、現行制度に対する具体的改善策を提示しました。論文執筆の際には、スイミングスクールで培った指導経験や野外スポーツ実習（海の実習）でのティーチング・アシスタント経験などを活かすことができました。

修了後は青年海外協力隊員としてコスタリカで水泳の普及・指導に取り組みます。

さらに将来的にはその実務経験や大学院での研究を活かし、国際協力の現場で体育やスポーツに携わる仕事をしたいと思っています。

イニシアティブ関連新規開講科目の紹介

この科目は、「魅力ある大学院教育」イニシアティブにおける新たな科目として今年度より開講したものです。科目群としては、研究を自ら運営し遂行する能力の習得を目的とする「研究マネジメント群」に含まれ、本科目の目的は、「受講生が研究プロジェクト（セミナーなど）を企画、遂行し、発表に至る協同的活動を自主的に行う」です。

今年度の受講生は5名で、それぞれの研究テーマは異なっていますが、セミナーの企画・立案の段階で話し合いを重ね、「モンゴル民族の暮らし」というテーマを設定し、国立民族学博物館教授の小長谷有紀先生に講師をお願いしました。2006年10月29日にセミナー

「研究プロジェクト演習」

藤原素子

社会生活環境学専攻 人間行動科学講座教授

ーを開催しましたが、それに至るまでに受講生はさまざまな事務的な手続きや広報活動のしかたを学び、実践しました。また、セミナー開催後には報告会を開き、受講生各自が本科目を通して得た内容（獲得したスキル、研究法の理解、自分の研究テーマとの関連性など）について発表が行なわれ、大変有意義でした。

本科目は学生主導型の演習であり、授業担当者（今井、藤原）は助言者として適当なタイミングでコメントをし、事務的な手続きの説明を行いました。受講生達が積極的に取り組む姿勢と、研究を運営する力、研究に対する広い視野を獲得して、たくましくなった姿が強く印象に残りました。

「研究プロジェクト演習」に参加して

野村理恵

博士後期課程 社会生活環境学専攻1回生



国立民族学博物館教授の小長谷有紀先生をお迎えし、モンゴル民族の暮らしについてお話いただきました。可視的には分からない空間的・歴史の変遷に着目し、「人と動物の関係」を軸とした講義を展開されました。活発な意見交換が行われ、モンゴル民族の遊牧生活の特徴、都市化・近代化に伴う生活の変容、日本とモンゴルの子育ての現状、及び砂漠化等の環境問題と多岐にわたる議論となりました。また海外調査の手法や姿勢についても学ぶことができました。参加者は38名で、企画者を含む学生、教員、学外参加者の方々それぞれに有意義な内容であったと思います。

本セミナーは、博士後期課程の授業である「研究プロジェクト演習」受講生5名が企画しました。その特徴として、①専門分野の異なる院生がひとつの企画をつくりあげたこと、②セミナー開催に向けて、担当教員を交えた企画会議を計7回行ったこと、③セミナー終了後、報告会を学内公開形式により行ったことが挙げられます。企画を進める中で、戸惑いや苦勞も多々ありましたが、企画から当日運営、報告会に至るまですべてを自分たちで行ったこと、またそれに対して客観的な意見をいただける場を持てたことは、今後の研究生活に向けて大きな財産となりました。

私の研究

私は近代、特に明治時代の「家族」について研究しています。修士課程より、明治中期に創刊された女性向けの雑誌である『女鑑』（じょかん）を分析対象としています。ここ2年間は「家庭」という言葉をキーワードとして、「家庭」に明治の人々がどのような意味を付与していたのか、その変遷を追っています。なぜ「家庭」をキーワードにするかという点、明治の人々は「家庭」という言葉に、近世とは違う「新しい家族」、「理想の家族」という意味を込めて使用していたからです。これは夫婦の愛情に基づき子どもを中心とする、欧米の“HOME（ホーム）”に象徴される近代家族観の影響を受けていると考えられます。ですが『女鑑』が創刊された明治中期

『女鑑』にみる近代「家族」

磯部 香

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生



は、欧化政策への批判や女子教育が強化される時期であることを鑑みると、日本独自の家族像を模索・構築する時期であり、「良妻賢母」に代表されるように「家族」が女性の領域となった時期でもありました。その点からも『女鑑』は「家族」の歴史を知る上で貴重な史料であるといえると思います。

また、私の所属するゼミは主に「家族」を研究対象としています。そのため世界の「家族」や今まで研究の射程とされてこなかった「家族」のあり様をゼミ仲間から知ることができます。それは私の視野を広げ、既存の価値観を揺り動かし、新たな発見をもたらしてくれています。





今回のセミナーは、新疆ウイグル自治区の人びとと暮らしについて多角的に学ぶという主旨で実施しました。前半は、甲南大学の堀先生から当地域の概要と文化のなりたちを歴史的な経緯に沿ってお話していただき、セミナー全体の輪郭を描いていただきました。服飾研究家の中川裕美先生には衣装・装飾品等の展示をしていただくと共に、色鮮やかな様々な様には水への憧れや人生哲学が表れているといったことを、実際に衣装を用いて解説していただきました。後半は院生による研究発表をおこない、古澤からは生業である農業の農地がどう変化しているのかについて、また鷺尾からは民謡曲と

人口減少化社会を迎える日本の都市政策は重要なテーマになっています。長年ドイツで都市計画、設計業務の現場に携わられてきた金沢美術工芸大学の坂本英之先生をお招きし、参加者には学外から建築、行政の実務に関わる方を交えてセミナーを開催することができました。最新のドイツの現状、ブラウンフィールドの再生、人口減少していく都市の住環境面の向上、市民と行政との協力の様子など

シンポジウムでは私の拙い経験をもとに、米国の院生支援についてお話ししました。米国の院生支援は、Fellowship（授業料・生活費の給付生）、TA、AI(Associate Instructor非常勤講師にあたる)、RA等、経済支援とキャリア支援が表裏一体となっています。これらの制度を通じて、多くの院生が学期毎の授業料免除と月々の生活費を得て学生生活を送るとともに、研究・教育に関するスキルを磨いています。院生は既婚者が多く、キャンパス内には保育所が併設されたア

学生への 研究支援

本教育プログラムには、大学院生の研究に対する自主性を養い、研究活動の企画力や遂行能力を高めるための支援体制が整っています。支援に関わる業務は大学院教育推進支援室が担当しています。イニシアティブ推進の拠点である支援室は、研究科各専攻の研究教育活動を支援したり、「メールニュース」「Initiative Information」「イニシアティブホームページ」を通じて大学院教育に関する情報を学内外へ発信するなど、様々な役割を担っています。

● 研究支援の内容

自主企画研究セミナーへの助成（講演者謝金、旅費、チラシ・ポスターの印刷費、報告書作成費など）

研究成果公開への助成（学術雑誌などに投稿するための投稿費や論文刷代など）

調査・フィールドワーク交通費の助成

パソコン、ビデオカメラ等の機材類やイニシアティブ関連図書の出貸

その他、ホームページ <http://www.nara-wu.ac.jp/initiative-life> をご参照下さい。（開室時間：月曜～金曜 10：00～12：00、13：00～17：00）

大学院生の自主企画研究セミナーⅠ

「シルクロードのひとびとー新疆ウイグルにおけるオアシスの生活と文化」

古澤 文

博士前期課程 国際社会文化学専攻1回生

いう側面から地域性について発表しました。事前に新聞等への告知を行ったため一般の方からの参加を多くいただき、総合討論の場では様々な角度からの意見を聞くことができました。関心のある話題提供者からの話を身近で聞くことができ、且つ、自分自身の発表の場を設ける事ができたことは今後研究を続ける上での大きな経験となりました。

日 時：2006年9月30日（土）13：00～ 於：本学大学会館大集会室
参加者：講演者2名、本学教員2名、本学院生・学部生10名、学外者27名、計39名

大学院生の自主企画研究セミナーⅡ

「ドイツの創造的都市縮小政策」

日高香織

博士前期課程 人間環境学専攻1回生

についてのお話しを、多くのスライドとともに伺いました。ドイツと日本では制度面で大きな違いもありますが、「創造」という言葉通りにポジティブな政策の姿勢を伺うことができたと思います。

日 時：2006年10月28日（土）13：30～ 於：本学生活環境学部
中会議室
参加者：講師1名、本学院生1名、学外者7名 計9名

FD研究交流シンポジウム

「FDと院生支援ーアメリカでの経験から」

菊澤佐江子

人間環境学専攻講師

パートもあります。但し、学業不振だと給付停止～退学勧告という厳しい側面もあります。活発な質疑に、改めて日米両制度について考えさせられました。

日 時：2006年10月4日（水）14：40～16：40 於：本学F棟5階
大学院会議室
参加者：講演者2名、本学教員13名、本学院生8名、本学職員1名、計24名